

生涯學習情報誌

Life Learning

1 2022
Jan.
NO.377

財団も社会も、進化の年だったと振り返るように

生涯学習開発財団 理事長 横川 浩

生涯学習開発財団ライフラーニング・メンバーのみなさま、
新年おめでとうございます。

私は2022年は「進歩」を超えた「進化」の年になると考えています。新型コロナウイルスに世界が脅かされるようになってから2年。不幸にも亡くなられた方や、いまだに苦しんでいる業界の方々も多くいらっしゃいますが、それでも人類は試行錯誤をしながら、たくましく前に進んでいます。生涯学習開発財団の存在意義を思うに、こういう時代だから



新事業の開発にも積極的に取り組みたいと話す横川理事長

こそ、それぞれの立場で難題に向き合い、新たな価値や生き方を築いていくこと、そのために学ぶことが重要と考えます。進化というのは、すぐに結果が出るものではないかもしれませんが。しかし、振り返ると、きっかけは見えるはずです。

当財団では、昨年から新たに「生涯学習開発財団松田妙子賞」を創設し、生涯学習の発展や社会のために優れた活動を顕彰することになりました。第1回は、東日本大震災以来福島県で、放射線の正しい知識学習をベースに住民の健康づくりに寄り添う、医療・健康社会研究所の坪倉正治代表に授与。第2回の本年度は、知的障害のある人のスポーツ振興を後押しするスペシャルオリンピックス日本の、有森裕子理事長（マラソンの五輪メダリストの有森さんです）に授与します。

生涯学習という言葉の普及から始めた松田妙子前理事長。その名前を冠した顕彰事業は、まさに私たちにとってレガシーです。私たちは「Share Your Happiness」の精神と生涯現役で世の中に役立つとした生き方に学び、私たち自身が進化しなくてはけません。幸いにも当財団の理事や事務局の人材は多彩です。本誌でも順次ご紹介する予定ですが、そうした才能を活かして、新しい時代にあった生涯学習事業を開拓し、世の中に貢献していきたいと思っております。

会員の皆様もぜひ、お知恵をお貸しください。2022年が財団にとっても、生涯学習社会にとっても、「転機の年」だったと後々振り返れるよう、いっしょに進化していきたいと思います！ よろしくお願いたします！

大森兵蔵・安仁子の願いを、ぎりぎり後世につなげられた 東京2020オリンピック・パラリンピック

——東京オリンピック・パラリンピックでは大会役員としておつかれさまでした。内側から見た東京大会を振り返ってください。

2013年の9月、ブエノスアイレスで開催されたIOC総会において、今回の東京開催が決まりました。ロゲ前IOC会長が「トーキョー」と読み上げたあの有名なシーンです。あのとき私は日本陸連の会長として出席し、安倍総理らとともにロゲ会長の目の前に座っていたのです。大震災から間もない日本に元気が出るニュースを届けたいと、誰もが一生懸命でした。高円宮妃殿下までもが総会でのスピーチにとどまらず、ロビー活動にも尽力してくださいました。私もぎりぎりまで、マラソンの有森裕子さんと一緒に各国の陸上関係者に声をかけ、東京に投票してくれるようお願いをしました。ですから「トーキョー」のあの瞬間、皆とともに歓喜したのを昨日のように覚えています。その後、陸連の会長として、また東京オリンピック組織委員会の理事として、東京大会成功に向けて船を漕ぎ出したのです。

●運命の巡り合わせが

その私に人一倍やる気を出させる話が、なんと当財団から出てきました。私は2016年に、松田妙子前理事長から「もつと世の中の役に立ちなさい」と促され、生涯学習開発

財団の理事についていました。その財団の理念の源流とも言える有隣園をつくった大森兵蔵は、日本が初参加した1912年のオリンピックに、日本選手団を監督として率いた人物だということではないですか。

そのいきさつはNHK大河ドラマ「いだてん」や舞台「アニーさん」で紹介された通りですが、私にとつては運命の巡り合わせでしょうか思いませんでした。陸連の人事においても、



本来は70歳定年が原則なのですが、2度任期延長になり、東京大会本番も大会役員を務めることになるのです。

●自分の子供を叩かれる思い

——本来なら喜びとやる気しかないですね。

それがなんというか、開催まで半年となった時期に、コロナウイルス感染拡大によって1年延期され、場合によっては中止まで考えなくてはいけない状況になるとは、予想だにしませんでした。

開催地として立候補したわけですから、問題を乗り越えながら開催する国際的な責任があるはずなのですが、そんな発言をすればたちまち炎上という空気でした。

思えば、新国立競技場の設計変更、大会エンプレム登用疑惑、バツハIOC会長の鶴の一声によるマラソン・競歩の開催地変更など、いろいろな予想外のことが起こりました。私にとつては運命の巡り合わせのオリンピックですから、自分の子供を叩かれているようで、辛い1年半を送ったというのが正直なところです。

——それでもなんとか開催できましたね。

大半の競技がコロナ対応で無観客になりましたが、始まってみればスケートボードの若い選手の活躍に始まって、マスコミの好意的な盛り上げもあり、多くの国民が「やってよ

横川 浩理事長 インタビュー

かった」と思ってくださいたのではないでしょう
うか。また、パラリンピックの各競技を普及
するという目的は、今回かなり達成できたと思
います。

● 静かな満足

役員の仕事としては、陸上競技場内での外国の陸上関係者の多少のお世話や、メダリストへのブリープレゼンターなどは予定通りしました。しかし、「おもてなし」という意味では、かなり抑え気味にならざるを得ませんでした。私自身も毎日PCR検査を受けていました。競技は選手の頑張りで盛り上がりつつありましたが、トータルでは、静かな満足という気分です。

——陸上競技で印象に残ったことは？

1年延期で選手の体調やメンタルの維持は難しかったと思いますが、一言で言えば「世界は強い」です。ボルトがいなくなっても新しい選手が出てきます。日本選手でも、子供が憧れて競技を始めるきっかけになるスターが、これからもたくさん出てほしいですね。そういう意味でも4×100mリレーには期待したのですが、攻めた結果の失格なのでしかなかったかもしれません。役員は、現場では競技場全体を広く万遍なく見ている感じなので、テレビとは違い、あの瞬間何が起こったのかは実はよくわからなかったんです。

一方で、これまで日本人がなかなか目立
なかった競技、110mハードル、3000
m障害、トラック中距離などで有望な選手が
出てきたことはうれしいです。競歩も表彰台
の常連になってきて、選手層が厚い日本の得
意競技になっていますね。

競技場内のバスを乗り間違えたジャマイカのハードルの選手が、ボランティアの女性の機転で競技に間に合い、金メダルを獲得したのも、印象的なエピソードでした。

大森兵蔵・安仁子が命を賭してまで日本人をオリンピックに参加させた意義や願いを、今回の東京2020オリンピック・パラリンピックでは、ぎりぎり後世につなげられたかなと感じています。



● 本誌新企画の理事長対談への思い

——話は変わりますが、各界で活躍する方に、横川理事長がお話を聞いてくださる新企画が、いよいよ来月号から始まります。

本誌『生涯学習情報誌』や財団Webサイ
トの記事を、会員や読者のみなさまにさらに
興味を持っていただくには、ということを常
に考えている中で、新しい対談企画をやつて
みようということになりました。

たとえばトップアスリートは、まず自分の
選んだ道でかなり短期間のうちに能力をアッ
プしなくてはいけないため、独自の努力や工
夫をしています。そして、故障やスランプ、
体力の衰えなどをどう乗り越えたか。引退を
して第二の人生を始めるためにどのように準
備をし学ぶのか。ものすごく考えて行動して
いるんですね。転職、定年後の仕事、生涯現
役といった生涯学習の目的達成とは共通する
部分があるのでないでしょうか。

● 第1回は朝原宣治さん

アスリートの他にも、芸術家、経営者、学者、
名工と呼ばれる方々など、各界で活躍する方
をご紹介します予定です。

第1回の対談相手は、以前私が陸上部の特
別顧問をしていた大阪ガスの朝原宣治さん
にお願いすることが決まっています。私が着任
したとき彼はすでにトップアスリートで、北
京五輪ではリレーでメダリストになりました
が、非常に人間力が高いのです。なぜそうな
れるのか、ヒントを聞き出したいと思います。
ご期待ください。

「新シリーズ」アスリートや各界で活躍する人に聴く
選んだ道で力を伸ばす方法と人生の転機におけるチャレンジ